

番号	
名前	

□ 次の詩と鑑賞文を読み、後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に記入すること)

青白い骸骨星座のよあけがた
 凍えた泥の乱反射をわたり
 店さきにひとつ置かれた
 提婆のかめをぬすんだもの
 にはかにもその長く黒い脚をやめ
 二つの耳に二つの手をあてて
 電線のオルゴールを聴く

(宮沢賢治『春と修羅』第一集収録の「ぬすびと」)

この詩は「かめ」の盗難を題材にしたものだが、奇妙なことに詩人は、かめが盗まれたことより盗人に多大の関心を持っていて、いずれも詩人の想念の世界(現実にならないものを見ているという意味で幻想)を描いたものである。この詩の前半は「かめ」を盗まれた店先の夜明け方の光景から描き、後半は盗人の逃走時の様子が描かれている。特に詩の後半に描かれる盗人の様子は、まるでムンクの「叫び」の登場人物(主人公とおぼしき人物)に重なるが、稿者(筆者)はその絵をモチーフとして、「ア」な盗人の姿を描いていると考える。

冒頭「青じろい骸骨星座のよあけがた」とは、「A」だが、寒々とした明け方、店先に置かれた大事な「提婆のかめ」が盗まれた様子が捉えられている。「凍えた泥の乱反射をわたり」とは、盗人が「かめ」を持ち去る時の、店先の地面の凍てついた泥に射し込む朝日が乱反射している様子である。へ1)詩人は盗人の逃走の痕跡「凍った泥」の碎け散った跡「凍った泥」を地面に見ているのである。

後半では、「かめ」盗人が一時逃走の脚を止める奇妙な様子が描かれている。へ2)盗人そのものの姿ではなく、「長く黒い脚」とあるように、朝日によって地面に映し出されたその影「イ」として描き出している。そして突然盗人はその脚を止め、耳に手を当てる頭上で強風に唸る電線の音を、まるで「オルゴール」の音色のように聞き入っているというのである。「冬のスケッチ 四、」にも「へ」にわかにも立ち止まり二つの耳に二つの手を当てる電線のうなりを聞き「ます」とあり、重要な「B」必要なものを並べること、またそれらのもの「である盗人の脚を止めた「オルゴール」こそ描かれていないが、この作品での盗人の様子を重なるものである。へ3)奇妙というしかない盗人の姿である。

ムンクの「叫び」は、「C」の中にあって感じた寂しさや不安を「ウ」としている。へ4)この石版(リトグラフ)の何枚かには、ドイツ語で画面の下に、「叫び」わたしは、「C」を貫く大いなる叫びを聞いた」と刷り込んでいる。またムンクのこの絵の成立に関する小文(日記など)が幾つか残っていて、その中の一文でも、友人と歩いていた時に突然訪れた寂しさ、疲労感、不安への脅えを感じ、「その時、「C」を貫く、はてしなく大きな叫びを感じていた」(一九九二年一月二二日の日記)と書いているのである。

さて「ぬすびと」も「叫び」も、ともに登場人物(主人公)が両手を耳に当てるという共通のポーズを取っているが、しかしそこに大きな違いが認め「a」ことも確かである。ある音を、前者は聞こうとして後者は聞くまいとして耳に手を当てるのである。ムンクの「叫び」の主人公は、耳に両手を当てる「C」をつらぬく大いなる叫びを聞くまいとその耳を塞いでいるのである。またその叫び「他の人々には聞こえない叫び」によって招来した、恐怖感や不安感を打ち消そうとして発した、自らの叫び声を聞「b」とするポーズともとれる。

へ5)「ぬすびと」の盗人の「エ」は、「叫び」の主人公のそれに似てはいても、実際は耳を塞ぐのではなく、唸る電線の音をまるでオルゴールに聞き入るかのよう、両手をそれに当てる聞いているのである。へ6)ポーズを取っているように見えて、ムンクの「叫び」では、寂しさ、疲労感、不安への脅えをもたらず「C」をつらぬく大いなる叫びを打ち消す主人公の姿が描かれているのに対し、「ぬすびと」ではオルゴールの音色に陶酔するコミカルな盗人の姿として描かれているのである。

(池川敬司『宮沢賢治との接点』より)

注1 歌謡の徒弟で、後弟子となるが危害を加えようとして失敗し、無間地獄に墮ちたという。だいた、ともいう。

注2 エドバルド・ムンク。ノルウェーの表現主義の先駆的画家。「叫び」は代表作。

注3 宮沢賢治の列のスケッチ作品である。

注4 リトグラフは、石版(石版石にインクで文字や図形を描いたもの)印刷による版画のこと。

番号
名前

問一 「ア」「ウ」「エ」に入れるのに最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- 1 モチーフ 2 シニカル 3 シルエット 4 ポーズ 5 コミカル 6 テーマ

問二 「A」に入る一文として適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- イ 星座の光が強く空に浮かび上がっている様子
ロ 星座の光が弱まって空に残った様子
ハ 星座が青白くくっきりした様子

問三 「B」は、ここに入れる言葉の意味であるが、次の中から最も適切なものを選び符号で記せ。

- a 整列 b 道具立て c 陳列品 d 調度品

問四 へ 1 ～ へ 6 ～ に入れるのに最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- イ それに対して ロ しかも ハ このように ニ いずれにしても ホ というのも へ 同じ

問五 《C》には同一の言葉が入る。次の中から最も適切なものを選び符号で記せ。

- 1 ところ 2 風景 3 世界 4 自然

問六 「a」と「b」に入れる最も適切なものを、次の中から選び符号で記せ。

- ア られない イ られる ロ ている ハ こう ニ くまい ホ いた

問七 文中に、詩「ぬすびと」とムンクの「叫び」の違いを端的に述べた部分がある。その部分をそのまま抜き出せ。(三十五字以内、句読点を含む)

(三)

Ⅲ 次の①～⑥の作家の代表作を、作品イ～への中から選び符号で記せ。

- ① 三島由紀夫 ② 安部公房 ③ 井上靖 ④ 川端康成 ⑤ 大江健三郎
イ 敦煌 ロ 砂の女 ハ 万延元年のフットボール ニ 夜明け前 ホ 金閣寺 へ 雪国

Ⅳ 次の文章を読み、傍線①～⑥のカタカナを漢字に直せ。

大正期の関東大震災、さらには昭和初期の室戸台風。大災害の経験をふまえ、物理学者の寺田寅彦は多くの①イマシメを後の世に残した。ある文章に「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」との②ウツタエがある▼国中に電線やパイプ、交通網が張り③メグらされたありさま「高等動物の神経や血管と同様である」。その一カ所が故障すれば影響は全体に波及するのだと(『天災と国防』)。1934年に書かれたものだが、現代にも通じる。台風15号の傷痕を目にして思う▼暴威に見舞われてから三日目となる昨日も、千葉県の広い地域で電気が止まったままだった。またの送電線が倒木で切断され、復旧に④テマ取る。被害のひどい君津市の市役所では、大勢の人が携帯電話の充電をしに來ていた▼スマホを手にした30代の女性は「電池が切れると、情報が何も取れなくて」と話していた。家がオール電化になっっているという60代の女性は、「何もできない。トイレの水すら、バケツを使わないと流せないんです」▼残暑というに暑すぎる日々に、クーラーや冷蔵庫なしの暮らしは、文字どおり命にかかると言われる。固定電話やコンロなど、電気なしでは使えなくなったものも増えている。もしものときの⑤ソナエは、どこまでできるのだろう▼寺田の考えだとして伝わる警句に、「天災は忘れたところにやってくる」がある。それにしても昨今の日本は、一つの災害を忘れるまもなく別の災害が起きるように思えてならない。

配点

II

問一	ア	問二	A	問三	B	問四	1	問五	①	問六	a	問七	
イ						2				b			
ウ						3		②					
エ						4							
						5							
						6							

II

①
②
③
④
⑤

III

①
②
③
④
⑤

番号
名前

